

- 1 事業名  
平成29年度 教育事業 「体験の風をおこそう」運動協賛事業  
さんりく体験！発見隊
- 2 趣旨（事業の目的）  
東日本大震災から6年が経過し、被災地も徐々にではあるが復興に向かっている。震災を「風化させない」「忘れない」ために、岩手県の将来を担う児童生徒たちが、被災地を訪問し、沿岸地域の人々と自然体験活動を通して触れ合う中で、被災地復興の現状を理解し、復興支援の一役を担う意識を高める。
- 3 期日 平成29年7月15日（土）～17日（月） 2泊3日
- 4 参加者 岩手県内の小学5年生から中学2年生 28名
- 5 共催 みちのく「体験の風をおこそう」運動推進協議会
- 6 連携・協力 岩手県立陸中海岸青少年の家 釜石市役所防災危機管理課  
東京大学大気海洋研究所 宝来館  
NPO法人 体験村・たのはたネットワーク

7 内容

(1) 日程

【1日目 7月15日（土）】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
受付・開会式	岩手山青少年交流の家 →釜石市 【バス移動】	釜石市役所で講話を聞く	移動	昼食	宝来館にて津波の講話&津波甚句	移動	東京大学大気海洋研究所で講話を聞く	移動	陸中海岸 到着	夕食	海釣り体験		入浴	就寝

【2日目 7月16日（日）】

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
朝食 荷物整理	陸中海岸 →大槌町 【バス移動】	城山公園 視察	海を知ろう 一般公開 東京大学大気 海洋研究所	昼食	→ 田野畑村 【バス移動】					田野畑村		民泊体験				就寝

【3日目 7月17日（月）】

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
田野畑村 民泊体験		サッパ 船 体験	机浜 番屋群 見学	昼食	田野畑村 → 岩手山青少年交流の家 【バス移動】					閉 会 式

(2) 講師及び指導者

岩手県立陸中海岸青少年の家	所長	菊池 啓子 氏
岩手県立陸中海岸青少年の家	指導員	似内 仁 氏
岩手県立陸中海岸青少年の家	指導員	佐藤 和行 氏
釜石市防災危機管理課	主事	菊池 広昭 氏
日本ボーイスカウト岩手連盟	理事長	末永 正志 氏
宝来館	女将	岩崎 昭子 氏
東京大学大気海洋研究所	教授	河村 知彦 氏
NPO法人 体験村・たのはたネットワーク	コーディネーター	赤坂 広太 氏
国立岩手山青少年交流の家	所長	松田 栄二
国立岩手山青少年交流の家	主任企画指導専門職	鎌田 信浩
国立岩手山青少年交流の家	企画指導専門職	上村 佳邦
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係主任	藤根 智子
国立岩手山青少年交流の家	事業推進係	佐々木翔也
指導補助		法人ボランティア（1名）

### (3) 企画のポイント

本年度の国立青少年教育振興機構における地域力向上事業として、岩手県立陸中海岸青少年の家と、企画段階から連携して地域の教育資源を生かすプログラムを活用した。検討協議した内容をもとに、野外活動や地域の方々との交流を通じて被災の状況や復興の様子を感じ取れるように、担当者は事前に現地へ足を運び、活動場所や連携先の開拓を行った。内容については、被災地の様子や復興状況について地域の実情を知り、震災を乗り越え、復興に向かっていく前向きな状況を感じとれるものに重点を置いた。

### (4) 広報のポイント

盛岡市、滝沢市、八幡平市、雫石町、花巻市の小中学校に向けて、印刷所に発注した約 20,000 枚のチラシを配布するとともに、本施設のホームページを活用し、幅広く企画の周知を行った。また「岩手日報」に参加者募集の記事が掲載され、岩手全県下に企画事業について周知することができた。

### (5) 運営のポイント

参加者が被災の状況や復興の様子を感じとれるように、実際に現地へ行き、見たり、聴いたり、ふれたりする活動を取り入れた。併せて、震災に関わる体験談や津波甚句を聞くことにより、震災当時の様子とは 6 年経った被災地の現状を重ね合わせ、これからの自分に何ができるかを気づかせていきたいと考えた。

初日は、釜石市役所防災危機管理課を訪れ、震災の映像と現在までの復興の進捗、そして、日頃の避難訓練の成果が小中学生の命を救ったことなど貴重なお話を聞いた。その後、根浜海岸にある宝来館にて津波に襲われ、孤立した中でも地域住民と助け合い乗り切ったこと、津波甚句を作り後世に日頃の備えの大切さや「てんでんこ」と呼ばれる自分の命は自分で守る意識をもつことの大切さを学んだ。

初日最後の活動として、岩手県立陸中海岸青少年の家での海釣り体験を行った。8 割の参加者は初めての体験で、海の雄大さはもちろんのこと海での楽しみ方も経験し、家族でまた海に来てみたいと口々に話していた。施設では、菊池所長から震災当初は避難所になったことや小学生が仮設校舎として勉強した話などを伺い、当時の大変な状況を学んだ。

2 日目は、東京大学大気海洋研究所の公開イベントに参加し、震災後の海中の変化を学んだり、海の生物を直接接触したりと普段はできない体験をした。大槌の住民による祭りも行われており、海とともに生活をする地域の人々ともふれあうことができた。その後、田野畑村において民泊体験を行った。民泊では、9 つの受入家庭に分かれ、漁業体験や食事作り、家族とのふれあいを行った。

3 日目はサップ船による海の野外活動を体験した。船に乗った子供たちからは「北山崎断崖の歴史について知ることができた。」「波を感じ自然や海とふれ合うことができたので良かった。」という感想が聞かれた。

## 8 成果とその普及

参加者の教育事業全体に関する満足度・プログラムに関する満足度は共に 100% であり、震災に関する学習に積極的に取り組みたいという気持ちが表れていた。参加者からは今回の事業を通して、「被災地のことなどたくさん学ぶことができた。被災地の魅力を内陸の人たちにいっぱい伝えたい。」「こわさはあつという間に薄れてしまうから、経験者たちがたくさんの人に伝え、それをもとに考えることが大事なのだと思う。」などの感想が聞かれた。

岩手県の内陸の児童生徒が震災時の沿岸部の様子を知ることと、復興の途上にある現在を見ることで、同じ地域としての一体感をもち、実情を広く伝えていくことに期待ができる。また、県立施設や他団体のもつ地域の教育資源を活用することで、沿岸地域の支援につながった。

今後は、さらに他施設・他団体との連携の拡充を図り、震災学習のモデルケースとして、県内の公立の青少年教育施設と連携を広げ、普及を目指し取り組んでいきたい。

## 9 今後の課題

今回の講義内容が、小学生高学年には難しい内容もあった。聞く活動が多くなったことから、体験を増やし、対象に応じた講義内容の要請も必要であった。また、ボランティアの参加が少なかったため、急遽中学生をリーダーとしてグループを構成した。このような場合に、中学生がよりスムーズにリーダーとしての活動ができるような仕組みを考えていく必要がある。参加者同士の意見交換や同世代の被災地の子供たちとの交流もあってよいと思う。そうすることで、長い交流が続くものとする。



震災当時の様子を聞き、日々の訓練の大切さを学ぶ



震災遺構の東京大学大気海洋研究所のイベントに参加



民泊の受け入れ家庭の方との出会いをする子ども達